

法助動詞 NEED の Force Dynamics

伊 藤 公 博

0. はじめに

Need という語には to 不定詞を伴う用法と原形不定詞を伴う用法がある。それでは、それらの用法にはどのような違いがあるのだろうか。Jacobsson(1974)は以下のような例を挙げている。

- (1) All that need be noted is...
- (2) All that needs to be noted is... (Jacobsson 1974:56)

Jacobsson は、上の二つの文においては、その使用に関する制限はないとしている。しかし、to 不定詞を伴う用法では(3)ということができのに対してそれに対応する原形不定詞を伴う用法(4)は不可能であるとしている。

- (3) It needs to be noted.
- (4) *It need be noted.

このような現象はなぜ生じるのであろうか。原形不定詞を伴う need の使用に関してどのような制約が関与しているのであろうか。この問題を論じる前に、原形不定詞を伴う need が現れる環境について概観してみようと思う。

1. NEEDの現れる環境

原形不定詞を伴う need は一般的には主として疑問文や否定文の中で用いられるとされている。しかしこのような定義だけでは need の使用域についての説明としては不十分であるように思われる。なぜなら、このような一般化だけでは(5)のような、否定文とも疑問文ともみなされなような文中に生じる need について説明することができないからである。

- (5) I have half an hour to spare before I need go. (Jacobsson 1974:57)

このように疑問文とも否定文ともみなされなような文中に need が生じている例をいくつか挙げてみる。

- (6) I need hardly say that one of my first actions on reaching England was to look up my old friend, Hercule Poirot. (Christie, *The ABC Murders*.)
- (7) There seems no other way, and fortunately we need concern ourselves with the one paper only. (Doyle, "The Adventure of the Red Circle.")
- (8) He need only state his opinion clearly. (Jacobsson 1974:60)
- (9) All he need do is take a taxi from the airport. (『アレクサンダー英文法』)

- (10) We shall have time for a mouthful of dinner before we need go. (Doyle, 'The Empty House.')
- (11) Poirot leaned forward. He became persuasive and a little more foreign than he need have been. (Christie, *Murder on the Orient Express*.)
- (12) I do not think that I need detain you any longer. (Doyle, 'The Noble Bachelor'.)
- (13) However much need be said, let it wait. (Jacobsson 1974:61)

これらの例文はどれも純粋な疑問文や否定文ではない。Jacobsson(1974)はこのような文脈の持つ含意を説明するのに「非主張性(non-assertiveness)」という概念を導入している。この「非主張性」とは、つまり、そこで表されている概念が、否定、疑問、譲歩の対象として、あるいは事実ではなく単なる可能性として認識されているということである。ここから出てくる仮説(14)により上に挙げたような例を説明することができるように思われる。

- (14) ≪原形不定詞を伴う need は非主張的環境¹においてのみ現れることができる≫

それでは、それぞれの例をこの仮説(14)に基づいてみていくことにする。

(6)に含まれる副詞 *hardly* は、*scarcely* や *barely* などと共に「半否定辞(semi negatives)」と呼ばれ、この種の副詞が現れる文中では *any* や *ever*、*at all* などの「否定極性項目(negative polarity item)」が用いられる。

- (15) We've scarcely any money left.
- (16) He's barely ever late for work.
- (17) He hardly got wet at all. (Longman Active Study Dictionary of English.)

また、この種の副詞は、*no* や *not* などの否定辞が文否定(sentence negation)で用いられ文頭に移動している場合と同様に「主語一助動詞倒置(Subject-Auxiliary Inversion)」を引き起こす。

- (18) Under no circumstances will she return here.
- (19) Not a moment did she waste.
- (20) Scarcely ever has the British nation suffered so much obloquy. (Quirk *et al*.)

この現象はまた、(7)や(8)に生じている *only* にも当てはまる。

- (21) Only after a year did I begin to see the results of my work. (Swan 1980:46)

以上のことから、(6)から(8)に生じているそれぞれの副詞との共起関係からも、それぞれの文が非主張性を持っているとみなすことができる。さらに *only* などの場合、日本語で考えてみても、「ただ～だけ」という概念は、「～しかない」という概念の裏返しであるとみなすことができ、そこから否定的な含みをくみ取ることもできるように感じられる²。

(9)の all もまた、ある概念を「すべて」と主張することは、裏を返せばそれ以外の概念の存在を暗に除外しており、only の場合と類似した非主張的な意味関係を持っているとみなすことができる³。

また(10)の接続詞 before も、日本語で考えると、「～する前に」は「～しないうちに」と言い替えることもでき、また、(22)のように before 節の中にも「否定極性項目」である any が現れうるという事実からも非主張性を有すると言うことができる。

(22) John left before anyone else did. (ジョンは誰も去らないうちに去った。)

それでは、(11)のような比較構文の「非主張性」はどうであろうか。

“A is -er than B.”(「A は B よりもーである」)という場合、焦点を当てられているのは A の指示物であり、B はその比較の前提となっていると考えられる。

このことは、前景化・背景化、あるいは「図」と「地」の関係という視点からも考察することができる。人間がある対象を認知する際には、その対象の最も際立った部分に焦点を当てながら認知していくと言われている(山梨 1995:11-12)。このことは、認知の初期段階だけではなく、人間が認知した概念を言語化する際にも当てはまるように思われる。つまり、ある文を発話する際、その発話主体は自分が最も伝えようとしていることを焦点化するものと思われる。その焦点化された部分が「図(figure)」、背景となっている部分は「地(ground)」とみなされるのである。

このような点から見ると、例えば(23)のような文は、(24)、(25)といった文と、その表している現実の状況は同じものなのであるが、それを発話主体がその現実の状況のどこをどのように切り取るか、つまり、何を「図」とみなし(前景化し)、何を「地」とみなす(背景化する)かという心的作用が反映されているのである。

(23) John is taller than Tom.

(24) Tom is smaller than John.

(25) Tom is not taller than John.

言語表現における「図」と「地」の区分について、山梨(1995)は以下のような基準を挙げている。

- (a) 新情報を構成する部分は図、旧情報を構成する部分は地。
- (b) 断定されている部分は図、前提とされている部分は地。
- (c) ある存在の位置づけに関わる場所ないし空間は地、そこに位置づけられる存在は図。
- (d) 移動する存在を表現する部分は図、その背景になる部分は地。
- (e) 省略されている部分は地、記号化されている部分は図。

(山梨 1995:14)

もちろん、これらの基準は絶対的なものではなく、図と地の区別は、その言語表現が現れている文脈や状況と発話主体の心的状況の相互作用により相対的に決まってくるものと考えられるが、上の基準は一般的に妥当なものであるように思われる。

つまり、(23)のような比較構文では Tom はその比較の前提とされており、また、比較の前提とされるためには、話し手と聞き手との間に Tom に関する共通に理解がなければならぬ。従って、Tom は談話の中では旧情報であると考えられる⁴。

“A is -er than B.”という記述では、A に焦点を当て前景化することにより、相対的に B は背景化される。背景化されているということは、その命題は主張(assert)されているのではないということができるであろう(=“B is not -er than A.”)。このような性質からも、比較構文には非主張性があると考えられる。

以上のことを need が用いられている例(26)に即してみることにする。

(26) Poirot leaned forward. He became persuasive and a little more foreign than he need have been. (=11)

この場合、話し手は、He(Poirot)の状態を叙述しているのであるが、than 以下の比較節での含みは、「必要とされている以上に」、つまり、「(そこまでは)必要もないのに」という意味合いであり、それが Poirot のとった態度の程度に関する前提となっていると考えられる。

このようなことから、(26)のようなタイプの文も「非主張性」を有しており、それゆえ、原形不定詞を伴う need が現れ得るのである。

それでは(12)のようなタイプの文の補文に現れている need はどのように説明されるのであろうか。

(27) I do not think that I need detain you any longer. (=12)

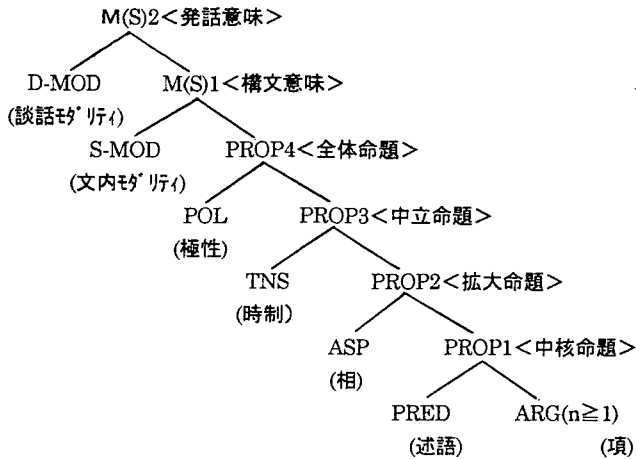
このような文は、一般的に「否定辞繰り上げ(Neg-raising)」が生じているといわれている。つまり、否定辞 not は、統語的には後続する think を否定するはずなのであるが、意味的には補文の need を否定しているのである。この現象を説明する証拠として(28)のような文を付加疑問文にした場合、付加節は‘can you?’となり補文中の‘can(not)’と呼応し(29)が生成されるという事実がある。

(28) I don't suppose you can do anything.

(29) I don't suppose you can do anything, can you?

また、中右(1994)は、この現象を「否定辞繰り上げ」規則を用いずに分析している。中右は独自の階層意味論モデルに基づき文の意味構造を大きくモダリティ表現と命題内容表現の二極に区分している。

(30) 階層意味論モデル (中右 1994:15)



そして、この階層意味論モデルに基づいて、(31)のような「付加疑問文の照応原理」を提案している。

(31) 「付加疑問文の照応原理」

付加疑問節(の主語と動詞)は、主文の全体命題 PROP4(の主語と動詞)に照応する。

(中右 1994:169)

中右の階層意味論とこの「付加疑問文の照応原理」によると、付加疑問文と否定辞繰り上げは以下のように説明される。

(32) I don't suppose the Giants will lose, will they?/*do I?

(中右 1994:167)

この文の主文'I don't suppose'は、この階層意味論に従うとモダリティ表現であり、また否定辞 not は否定辞繰り上げの結果として複文から主文に移動したのではなく、他の要素と共に主文全体で否定的なモダリティ表現を形成し、後続する全体命題 PROP4 をその作用域に含むとされる。すると、「付加疑問文の照応原理」によって、命題内容表現である'the Giants will lose'に照応して、「will they?」という付加疑問節が形成されるとしている。しかしながら、仮にこのような原理にしたがって、付加疑問節が形成されるとすると付加疑問節の形成に関する一般的性質と矛盾してしまうことになるのではないだろうか。この一般的性質に関しては中右自身も以下のように述べている。

- (33) 『付加節は、①助動詞＋主語代名詞からなる疑問形式を備えていること、②その主語と助動詞は主文の主語と(助)動詞に照応していること、③通例は主文と極性値の対立があることなどである。』
(中右 1994:166)

「付加疑問文の照応原理」と(33)の一般原則に従うと、(33)の③の性質から'the Giants will lose'の付加節には'won't they?'が形成されるはずである。(32)が付加疑問節の形成に関して「付加疑問文の照応原理」に従い、また、仮にそこに現れている否定辞 not が最初から主文に存在するとしても、その意味的な作用域は主文の動詞 suppose ではなく、補文の will に及んでおり、ゆえに付加疑問節'will they?'が形成されると考えることができるのではないだろうか。

このように「否定辞繰り上げ」規則に対しては、さまざまな見解の相違があるが、いづれにせよ、(12)のようなタイプの文が非主張性を有していることは説明される。

最後に、(13)のように need が譲歩節中に現れている場合はどうであろうか。このような例も、主張的なものではないとすることができる。譲歩節においては、その必要性は仮にそれが現実の必要性であるとしても、その文脈中では主張(assert)されていない。つまり、その必要性は、一時的にせよ話し手の持っている現実に関する想定集合から除外されているものと思われる。

以上みてきたことを考慮すると、原形不定詞を伴う need が現れる環境は、単に否定文や疑問文といった統語論的な構造からだけではなく、「非主張性」という意味論的な要因によっても制限されているとすることができるであろう。

2. NEEDの語法

前節では原形不定詞を伴う need の現れる環境についてみてきた。それでは、need という語の意味は、どのように規定されるのであろうか。

2.1 to 不定詞を伴う形式と原形不定詞を伴う形式の意味の違い

Need の to 不定詞を伴う用法と原形不定詞を伴う用法との意味の相違に関しては、以下のようなことが言及されている。(Perkins 1983, Leech 1987², Dixon 1991)

- (A) to 不定詞を伴う用法は客観的な判断に基づき、原形不定詞を伴う用法は主観的な判断に基づく。
- (B) to 不定詞を伴う用法は、文の主語の内部からの衝動により引き起こされる必要性を表すのに対し、原形不定詞を伴う用法により表される必要性は、外的な要因と関与している。

ただし、to 不定詞を伴う用法が、文の主語の内的衝動と結びついているにも関わらず、客観的であるということについて、Perkins(1983)は(34)のように説明を加えている。

- (34) ...although such compulsions are seen to originate within, and in some cases where the subject of the sentence is in the first person are seen to originate within the speaker himself, they are still explicitly objective...since they come from the part of the speaker over which he has no conscious control. (Perkins 1983:62)

つまり、そこに生じている必要性は、その文の主語が主体的・意図的に制御することができないという点で、主観的なものではないのである。

2.2 原形不定詞を伴う need の語法

Duffrey(1994)は、原形不定詞を伴う need の意味を以下の3タイプに分類している。ただし、第1節で見たように、need は非主張的環境のみに現われ得るため、実際には以下の(A)から(C)のそれぞれにおいて、その意味関係は反対のものになる。

(A) 必須性(indispensability)

何らかの権威が動詞により表される事象の実現の必要性を主張(assert)している。あるいは、その事象の実現のための重要な動機づけが存在する。

このタイプには以下のようなものがある

- (35) She cut short a flowery phrase of apology from M.Bouc.

'You need not offer apologies, Messieurs. I understand a murder has taken place.'
(Christie, *Murder on the Orient Express*.)

このタイプは、時として命令的なニュアンスを持つように感じられる。また、聞き手(you)がその文の主語であることが多い。

(B) 不可避性(inevitability)

ある事象の実現を余儀なくさせるような避け難い原因・理由が存在する。

- (36) 'I need hardly ask you the number of your compartment,' said Poirot, smiling. 'since I shared it with you for a night. It is the second-class compartment. No.6 and 7, and after my departure you had it to your self.'
'That's right.'
(Christie, *Murder on the Orient Express*.)

この用法は「(ある根拠からして)~するには及ばない」といったニュアンスで用いられるように思われ、上の例文のようにその理由が明示されている場合もある。

(C) 論理的必然性(logical necessity)

ある命題を真であると結論づけるのに十分な根拠が存在する。

(37) He may be there, but he needn't be.

(Palmer 1990:61)

(38) She needn't have hidden the key.

(Young 1980:90)

この用法は、日本語では「～とは限らない」といった意味合いになるが、Cates(1983)によると、この意味で用いられる。need は非常に少なく、彼女の用いたコーパス中でも、大部分(87%)は根源的用法、つまり、(A)か(B)の用法であったと述べている。

3. NEED の FORCE DYNAMICS

2.2 でみた原形不定詞を伴う need の用法は、一般的に、(A)と(B)は根源的(root)用法、(C)は認識的(epistemic)用法という法助動詞全般の用法に分類されるが⁵、これらはそれぞれ完全に独立した別個のものなのであろうか。Need の根源的用法と認識的用法の間には何らかの関連があるのだろうか。つまり、need という語が、必要性という物理的世界の領域に関係する概念と、論理的必然性という発話主体の心的態度に関する領域の両方に用いられるのには何らかの動機づけがあるのだろうか。

Sweetser(1990)は、法助動詞はその意味として二つの下位範疇を持つ、つまり、根源的用法と認識的用法という二つの部分集合から成るのではなく、認識的用法は根源的用法からの比喩的拡張であると主張している⁶。

(39) Sociophysical forces acting on the subjects are taken as analogous to the logical "force" of premises acting on the speaker's reasoning processes.

(Sweetser 1990:62)

我々は、外部世界を叙述するのに言葉を用いるが、同時に、その外部世界を捉えるための概念で内的(心的)世界をも比喩的に把握している。つまり、我々は自身の内的世界を理解しようとする際に、内的世界を外的世界と平行した構造を持っているとみなしているのである。それゆえに、元来、外的世界の記述に用いられる表現で内的世界をも表すことが可能になるのである。

このように人間の心的世界を、外的世界を叙述するのと同じ言語表現で表す際に重要になってくる要因が force dynamics⁷ という概念である。法助動詞の根源的用法が認識的用法に拡張されるということは、force dynamics の影響が外部世界から心的世界に写像されるということであると考えられる。

法助動詞の多義性は、根源的用法から認識的用法への拡張という視点と、force dynamics という概念を導入することにより、統一的な説明が可能になるように思われる。

Force dynamics という概念は、直接的には force と barrier といった概念と関連するものであり、法助動詞との関わりにおいては、「義務」や「許可」という概念からみてゆくことができる。この概念を用いて Sweetser は法助動詞の may と must を以下の(40)と(41)のよ

うに分析しており、それぞれの a と b は force dynamics の点からみると平行性があると述べている⁸。

(40) MAY

a. John may go.

“John is not barred by (my or some other) authority from going.”

b. John may be there.

“I am not barred by my premises from the conclusion that he is there.”

(41) MUST

a. You must come home by ten. (Mom said so.)

“The direct force (of Mom’s authority) compels you to come home by ten.”

b. You must have been home last night.

“The available (direct) evidence compels me to the conclusion that you were home.”
(Sweetser 1990:61)

根源的用法(a)の場合は、その文の主語を何らかの行為や状態の実現に向かわせる force あるいは barrier となるのは、現実世界における何らかの権威の力、あるいは、不可避免的な原因の存在なのであるが⁹、認識的用法(b)においては、発話主体の持っている想定が force あるいは barrier となっており、かつ、認識的領域において force あるいは barrier となり得るものは、その想定のみである。そして、このように根源的用法が比喩的に認識的領域に拡張されるという現象が慣用化した結果、根源的用法と認識的用法という区分が存在するようになったというのである。

また、Sweetser は may と must 以外にも様々な法助動詞 force dynamics の点から考察しているのであるが、need に関しては以下のように分析している。

(42) NEED TO

a. He needs to go to the grocery store. (ROOT)

“Some internal force (e.g. wanting to eat tonight) compel him to go to the store.”

b. No, he needn’t be a New Yorker — he could just have lived there a long time, or imitate accents well. (EPISTEMIC)

“The available premises do not force me to conclude that he’s a New Yorker — they could also lead to other conclusion.”
(Sweetser 1990:62)

このように Sweetser は need の根源的用法の例として need to の用例を挙げている。しかしに、前節で述べた need to の持つ「内的衝動」という性質からみても、この need to に関する分析は適当であるように思われる。しかし、原形不定詞を伴う need の用例は挙げられていない。2.1 でみたように need+原形不定詞と need+to 不定詞には意味論的に相違があるため、上のような分析は、若干、妥当性に欠けるように感じられる。それでは、原形不定詞を伴う need の根源的用法はどのように分析されるのであろうか。

Coates(1983)によると need は、否定形において must が主陳述を否定するのに対して、法陳述を否定するのに用いられるとされ、(43)のようにパラフレーズされている。

- (43) John needn't go. = 'it isn't necessary for John to go.'
John mustn't go. = 'it is necessary for John not to go.' (Coates 1983:51)

Need がこのような性質を持っているとすると、根源的用法における need の force dynamics に関しては以下のように考えていくことができるように思われる。

まず、must には(41a)のような force dynamics があるとすると、mustn't の場合は(44)のように考えることができる。

- (44) You mustn't come home by ten. (Mom said so.)
"The direct force (of Mom's authority) compels you not to come home by ten."

すると、needn't は(41)の法陳述の否定であり、また、第1節でみたように非主張的環境に現われることにより、「何らかの権威、ある事象の実現に対する重要な動機づけ、ある事象が引き起こされるのに避けることのできない原因・理由の存在」がそこで表されている必要性を主張(assert)しないという意味関係を持つことになるということから、(45)のように分析するのが妥当なのではないだろうか。

- (45) You needn't come home by ten.
"The direct force (of someone's authority or some reason) does not compel you to come home by ten."

また、認識的用法に関しては、(42b)あるいは、(46)のようにみなすことができるであろう。

- (46) "The available premises do not necessarily lead me to the conclusion that he's a New Yorker — they could also lead to other conclusions."

以上のことから、非主張的環境に現われる need は、根源的用法においては、文の主語に対しそこで要求されている行為の実現を強いるような何らかの権威による'real-world force'が存在しないということを含意するのであるが、認識的用法の場合、この force dynamics が発話主体の認識的領域に写像されているのである。すると、今度は force dynamics が発話主体の有する想定の場合に適用され、その結果'epistemic-world force'とみなされるその想定の場合からは、その文により表されている結論には、必然的には至らない—他の結論にいたる可能性も除外することはできない—という意味関係を持つことになるのである。逆に、認識的用法の need が現われている場合、発話主体は、その文で表されている命題を真であると結論づけるのに十分な想定を持っていないということもできるであろう。

4. 文脈との関係

以上のように force dynamics という概念を導入することにより、それぞれ完全に別個の用法であると考えられがちな根源的用法と認識的用法を統一的な視点から説明することができる。しかしながら、聞き手の方は、その force dynamics が根源的・認識的のどちらの領域に適用されているのかをどのように判断し、その法助動詞を含む文を解釈するのだろうか。Sweetser(1990)は、聞き手がその force dynamics の作用している領域を判断する際には語用論的要因が関わってくると述べている。

(47) I swayed the interpretation of "John must go to all department parties." Toward an epistemic reading by adding a clause expressing a reason for reaching a conclusion. If, instead, I had added a clause expressing a real world cause (such as "because he agreed to be bartender"), then the weight would have been towards a root meaning. Sentence concerning the past actions are strongly weighted towards an epistemic reading because real-world causality or modality can no longer influence frozen past events.... Conversely, modals in sentences concerning future actions are weighted towards a root reading, although an epistemic reading is not excluded.

(Sweetser 1990:64)

また、2.2 でみたような根源的 need の(A)と(B)のような意味の違いはどのように説明できるのであろうか。これらの違いもまた、単に need という語に内在的な性質からだけではなく、文脈との関係から考察していくことができるように思われる。前節までに見てきたような need の用法は、need という語の完全な辞書記載項目として存在するのではなく、この語に内在的な force dynamics とその文が生じる文脈との相互作用の結果として引き出される部分もあるということができあろう⁹。以下では実際に need が用いられている例を、その前後の文脈との関わりという点から考察していく。

(A) の例

(48) 'You will now light the gas, Watson, but you will be very careful that not for one instant shall it be more than half on. I implore you to be careful, Watson. Thank you, that is excellent. No, you need not draw the blind.'

(Doyle, 'The Adventure of the Dying Detective.')

この用法では、そこで表されている行為の必要性は、話し手の権威によって否定されている。この話し手の権威がこの need の force dynamics の源となっている。この場面では、話し手(Holmes)が聞き手(Watson)に対してブラインドを降ろすことの必要性を否定しているのであるが、その要求は命令的、かつ主観的なものであるように感じられる。このことは、先行する発話中に強い要求(懇願)を表す implore という語が用いられていることや、

それ以前の発話中にも主観的義務を表す *must* と交換可能な *will* が用いられていることから推測される¹⁰。

(B) の例

(49) 'The task before me,' said Poirot, 'is to make sure of the movement of everyone on the train. No offence need be taken, you understand? It is only a matter of routine.'
(Christie, *Murder on the Orient Express*.)

(50) 'You need not be uneasy. He will not try to escape.'

'How do you know?'

'To fly would be a confession of guilt.'
(Doyle, 'The Dancing Men'.)

これらの例では、話し手の権威ではなく、その必要性を否定するような十分な理由が、後続する発話によりそれぞれ表されており、それがその必要性を否定する *force dynamics* の源であると考えられる。

(C) の例

(51) 'Why, I wonder at that, for you are eligible yourself for one of the vacancies.'

'And what are they worth?' I asked.

'Oh, merely a couple of hundred a year, but the work is slight, and it need not interfere much with one's other occupations.'
(Doyle, 'The Red-Headed League'.)

第3節で述べたように、認識的世界において *force dynamics* の源となりうるのは、話し手の持つ想定のみであり、ここでは、「その仕事为本業の妨げになる」と結論づけるための十分な想定を話し手は持っていないのである。また、直前の 'the work is slight' ということも、話し手がこの *need* を含むぶんにより表されている命題には必ずしも至らないと考える根拠になっているように思われる。

5. 終わりに

このように *need* の性質を *force dynamics* の点からみると、原形不定詞を伴う用法の根源的・認識的用法を統一的な視点から説明することができる。すると、*to* 不定詞を伴う用法までも同様の視点から統一的に考察していくことも可能なのではないだろうか。この場合、原形不定詞を伴う用法との意味論的な相違点、つまり、*to* 不定詞を伴う用法に独特な性質は、*need* の *force dynamics* と *need* が用いられているコンテキスト、それらに加えて、不定詞を伴う 'to' の持つ属性との相互作用により規定されると考えられる。

1. Quirk *et al.*(p.775 以下)に『非主張的環境(non-assertive context)』に関する一般的記述がある
2. また、このタイプの変種に‘He need but do so.’のような文がある。
3. Duffrey(1994)では、‘His book covers most that need be said on the subject.’といった文を最上級の文として扱っているが、(9)のように all を含む文と意味的に類似したものとして分類するのが適当であると思われる。
4. この読みはあくまでも文に関する強勢などの点で無標の場合に関してであり、Tom に強勢が置かれた場合など、情報構造上 Tom の方が重要な場合も考えられる。
5. 法助動詞の認識的用法と根源的用法に関して Coates は以下のように述べている。
 “It (= epistemic modality) is concerned with the speaker’s assumptions or assessment of possibilities and, in most cases, it indicates the speaker’s confidence(or lack of confidence) in the truth of the proposition expressed.”(Coates 1983:18)／“Non-epistemic modality, which I shall call ‘ROOT’, is more difficult to characterize.”(Coates 1983:20)
 根源的用法は Coates が述べているように非常に多様な意味を含んでいるため、明確に規定することは困難であるが、概略、以下のように考えられる。
 『主語・話し手の有する「能力」、「義務」、「必要」、「意志」、「許可」といった意味を持つ、…』(澤田 1993:190) (また、Quirk *et al.*による‘intrinsic / extrinsic’の分類も参照。)
6. 法助動詞、発話行為動詞、法副詞を取り上げて、その意味が外部世界の叙述から心的の世界へと拡張されてきた変遷を、通事的・共時的側面から詳細な分析を試みているものに Traugott(1989)がある。
7. この概念について Talmy(1988)は以下のように説明している。
 “force dynamics” — how entities interact with respect to force. Included here is the exertion of force, resistance to such a force, the overcoming of such a resistance, blockage of the expression of force, removal of such blockage, and the line.
 (Talmy 1988:49)
 ...FD(=force dynamics) thus emerges as a fundamental notional system that structures conceptual material pertaining to force interaction in a common way across a linguistic range: the physical, psychological, social, inferential, discourse, and mental-model domains of reference and conception. (Talmy 1988:50)
8. My claim, then, is that an epistemic modality is metaphorically viewed as that real-world modality which is its closest parallel in force-dynamic structure. (p.59)
9. また、言語的コンテクストだけではなく社会的コンテクストも根源的・認識的用法の解釈に貢献すると考えられる。
10. Leech(1987²:86)は以下のように述べている。
You will do as I say; The Duty Officer will report for duty at 0700 hours. This will is a stronger equivalent of must, and express the will of the originator of the message, rather than of the subject.

参考文献

- Coates, J. (1983) *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. London: Croom Helm.
(澤田治美訳『英語法助動詞の意味論』. 東京: 研究社、1992)
- Dixon, R.M.W. (1991) *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*.
Oxford: Clarendon Press.
- Duffrey, P.J. (1994) "Need and Dare: The Black Sheep of the Modal Family.", *Lingua* 94,
pp.213-243.
- Jacobsson, B. (1974) "The Auxiliary NEED.", *English Studies* 55, pp.56-63.
- Leech, G.N. (1987²) *Meaning and the English Verb*. London: Longman.
- 中右 実 (1994) 『認知意味論の原理』. 東京: 大修館書店.
- Palmer, F.R.(1990²) *Modality and the English Modals*. London: Longman.
- Perkins, M.R. (1983) *Modal Expressions in English*. London: Pinter.
- Quirk, R., S.Greenbaum, G.Leech, and J.Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of
the English Language*. London: Longman.
- 澤田 治美 (1993) 『視点と主観性』. 東京: ひつじ書房.
- Swan, M. (1980) *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.
- Sweetser, Eve E. (1990) *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge: Cambridge
University Press.
- Talmy, L. (1988) "Force Dynamics in Language and Cognition." *Cognitive Science* 12,
pp.49-100.
- Traugott, E.C. (1989) "On the Rise of Epistemic Meanings in English : An Example of
Subjectification in Semantic Change." *Language* 65, pp.31-55.
- 山梨 正明 (1995) 『認知文法論』. 東京: ひつじ書房.
- Young, D.J. (1980) *The Structures of English Clauses*. London: Longman.